

医者 VS 患者

動物は出会った瞬間の一瞥で、どちらが優位かを悟るという
人間にもそのような本能があるのかもしれない
医者と患者では
どちらが優位かは周知の通りである
勝負は診察室に入る前からついている
優者である医者を前に劣者である患者は 己の劣勢を噛みしめる
己の身体や精神に何らかの不具合を抱いた時から持つ
不安と慄き
それは病気の大小にかかわらず
人を脅かす
咳が続く、目が霞む、だるい、痛い・・・
なんでだろう
何かしたかな
得体の知れない不安が脳裏を廻る
その不安というハンディを抱え
患者は医者と対峙するのだ
更に
医者を前に自分のウィークポイントを曝け出さねばならない
惨めさが伴う

優位に立つ医者も実のところ安易ではいられない
次はどんな病気を持つ患者がくるのか
こちらの知りたい情報を的確に話してくれるだろうか
ぐだぐだ とんちんかんなことを話されては困る
泣いてすがりつかれたり
殺気だって迫ってこられたら どうしよう
まだ沢山の患者が待ってる中で
瞬時に判断しなければならない
果たして自分は正しく診断できるのか
薬はどれが合うのか

もし、病気を見落とししたら、見抜けなかったら
誤診だったら・・・
その迷いや不安を患者に悟られないように
冷たい砦で己を守っているのだ
患者のおどおどした声も
信頼されていないようでイラつく
余計なことは聞かずに、早く切り上げるに限る

〈体験その1〉

お腹が膨張して痛くて病院に駆け込んだとき
ものを言うのも面倒で医者のがすがままに任せていたら
「あなたまだ盲腸がありますね。とりあえず盲腸を切りましょう」と言われ
そのまま手術されてしまったことがある。
盲腸は炎症もなにもしていなかったにもかかわらず
「開腹すれば収まるものです」と
しかしそこで、
「手術は嫌だ」とか、「家に帰って相談します」とか
ごねて拒否する気力もなかったのだ

〈わたしの警告1〉：あまりにも気力が萎えているときは病院に行ってはならない
医者と闘えない

〈体験その2〉

2ヶ月ほど咳が続き、あまりに咳き込むので何も食べれなくなり
栄養剤の点滴を頼みに行ったとき
血液検査の結果を診て
「こんな飽食の時代に、こんな栄養失調の人を初めて診た
そんなににこにこして話してるけど、あなたは仮面うつです。
このまま即刻2ヶ月入院。家には帰しません」と
点滴の間中、しつこく入院を迫るドクター
「ちゃんと食べますから」と
何度も謝ってやっと帰してもらった
その後、2～3件ドクターショッピングをして
気管支喘息と判明、
「気道が細くなっているので食べにくいでしょう。
食べられないのが当たり前です」と

言われ合点がいった。

〈わたしの警告2〉：親切な先生でも見当違いがある

〈体験その3〉

仲良しになった先生がいる
いつも診察室の外まで患者を迎え出る
一番苦しいときに
温かい信頼の言葉をかけて下さった
いつ思い出しても胸が篤くなる
「毎日苦しいです」と
お便りに綴られていた患者への思い
思いは必ず通じる

〈わたしの文殊の知恵〉

医者も患者もオープンマインドならば、
必ず通じ合う
殻を脱ぎ捨てよう
お互いに
裸になれば同じ人間
患者あってこそその医者
医者あってこそその患者
心の砦から一歩踏み出そう

患者＝医者＝患者＝医者＝患者＝医者＝患者＝医者＝患者＝医者＝患者＝医者